bunka@ryukyushimpo.co.jp
TEL 098-865-5162

メディア時評〈4月〉

山田 健太

放送100年の節目

ネットと融合現実に
民主主義どう強くするか

この1年間は〈放送〉にとって大きな節目だ。2025年3月22日は日本で放送が始まってから100年。大正末期に誕生したラジオから戦後のテレビ、そしてデジタル化が進み、インターネットとの融合が現実のものとなった。今国会に上程された放送法改正案は、NHKのネット事業を必須業務とすることで、公共放送が電波でも通信（ネット）でも流れる時代を名実ともに迎えることになる。

NHKネットへ

23年10月に総務省の有識者会議「デジタル時代における放送の将来像と制度の在り方に関する検討会」は、NHKによるネットでの番組配信をテレビ放送と同じ「必須（本来）業務」に格上げする報告書を発表。テレビを持たずにスマートフォンなどで番組視聴する利用者には「相当の費用負担」を求めることも盛り込まれた。この間、パブリックコメントも実施され、その中には昨年交代した前会長（とみられる）の現執行部批判のコメントがあり、業界内では話題になったりもした。

さらに「日本放送協会のインターネット活用業務の競争評価に関する準備会合」が継続中で、競争評価プロセスが示されている。ネット活用事業については、民放連や新聞協会を含む関係者で構成する検証会議の結果を電波監理審議会に諮問して事業を行っていくというものだ。

なお、前述の報告書が出された後も、同会議の中核的分科会である「公共放送ワーキンググループ」などでは議論が継続されている（24年2月には第2次取りまとめ発表）。その過程でNHKは、ネット上のコンテンツを放送に対する「理解増進情報」としてのサービス提供だとの考え方を事実上、撤回した。「テキスト情報をネットでは流さない」ことを約束し、民業圧迫と批判を強めていた新聞界と「手打ち」をした格好だ。

実際この4月には、ネットでのオリジナルコンテンツで一定の人気があった「政治マガジン」「事件記者取材note」など、政治・社会・国際・科学・スポーツ各分野の記者コラムなどのテキストニュースサイトの更新を一斉に停止。売りものだったネットワーク報道部の活動を一気に縮小する動きを見せている。

NHKの必須業務に番組のインターネット配信などを加える放送法改正案。審議の行方が注視される

情報の価値

この間、23年からは受信料の1割値下げが始まり、地上契約が月1100円、衛星契約が月1950円になったが（沖縄はさらに安い）、これにより1千億円程度の減収になることが確定、予算規模は6千億円台前半に落ち込む。

一方で、12月には衛星2波が統合され「NHK BS」になり、4K、8Kチャンネルと合わせて計3波体制になったほか、ラジオについても教育チャンネルがなくなった。さらに地方局の組織や人員の縮小も進み、もはや地元メディアとの互角に取材競争はできないとの危惧の声も聞かれる。予算の大幅削減の中、ネットへの進出で支出が増加する分をチャンネル減や取材経費減で賄うという構図がはっきりしてきた。

受信料から放送事業の発展を振り返ってみると、ラジオに始まり、白黒テレビ契約にカラー料金をプラス、衛星料金を別建て徴収と、伝送路・画質・チャンネル数増加と付加価値を付けることでテレビの魅力を高め、事業を拡大してきた。

しかし、デジタル化で画質は上がっても、ハイビジョンや4Kになっても、それによる受信料引き上げは実現してこなかった。そして今回も、ネット料金は受信料とは別モノであることが強調され、放送総体の魅力をアップするというよりは、安い受信料もどき料金を設定して、テレビ非接触層を取り込みたいという希望的観測が垣間見える。

確かに〈料金の壁〉を解消することは必要ではあろう。日本社会総体の貧困化が進む中、情報に対する生活支出の枠が増えないとすれば、今や若者に限らず多くの一般ユーザーにとって「必需品」である動画配信サイトが千円足らずの中、それより高額のNHK受信料をさらに別に払うことへの抵抗感は小さくない。もっといえば、YouTubeなどのSNSはタダだ。ついでながら、新聞代が3千円を超えることは論外ということになりかねない（在京紙はさらに千円高い）。

ニュース価値

こうしてみるとNHKのみならず、新聞を含めた伝記事を書きたいのならば、新聞社と共同取材・共同出稿をする途もあり得るし、番組化もできるだろう。番組にするのはハードルが高いので、気軽にネット配信をして、可視化されるアクセス数をみて満足することを繰り返していても、社会の情報に対する価値の向上にはつながらない。

あえて言えば、情報はタダの空気感を後押しする結果にもなる。それは新聞や民放の衰退にもつながるし、何よりNHK受信料の支払いも低下していく要因になるだろう。もちろんテキストベースでも、スマホ向けの斬新な表現手法を生み出し、そのノウハウを民間（民放や新聞、あるいはフリージャーナリスト）に公開していくようなことをするなら大歓迎だ。

同じ土俵であったり、隙間を狙っていたりしては、全体のニュースコンテンツの需要は低下する一方である。何より、数あるメディアの中で最も公共性を有する、法で守られた公共放送たるNHKには、日本社会の民主主義を発展させる法的・社会的義務がある。

放送100年そして新聞160年に向け、NHKのみならずニュースコンテンツをどうしていくかは、いま私たちに突き付けられている大きなテーマである。このまま市場に任せた場合、企業としては消滅しないにせよ、報道機関としての役割・機能は大きく低下する可能性がある。こうした市場原理に大きな影響を与えるのがNHKビジネスのありようであって、実は目前の放送法改正の真の命題は、ここにある。

（専修大学教授・言論法）

（第2金曜掲載）

◇　◇

本連載の過去の記事は本紙ウェブサイトや『愚かな風』『見張塔からずっと』（いずれも田畑書店）で読めます。

琉球詩壇

西原 裕美・選

愛煩い

藍原 知音

強欲を抱えた一度限りの生の真っただ中
最たる感情の総称は愛だと
齢一桁で何となく知り得た

愛とやらがほんのりと痛みを教えるころに
言葉足らずに気づいた
悲哀ばかりが輪郭を持ち
贈りたい想いは揺らぎ続けている
心に付随した声帯の精神の脆弱さが
人物相関図に起こる変化を恐れている

飽くまで生きた心地は
はるか遠くにのみ在って
齢二十を支える垂涎の的は
帰巣本能を有した言葉へ等式を保つ愛こそ
一切衆生の精神安定剤であるという
科学ぶったメタフィジカル錠剤
都合よく語る有耶無耶な言い訳は

2日

私が引き受けている領事連　らユーロに代わっていた。　の銀行って、こんなに簡単に　いと開かない。

テルマエ展」、6月9日まで

る作品や資料、日本の入浴を紹介する「テルマエ展」京都港区のパナソニック汐留美術館で開かれている。

巨大な浴場を建設したカラカラ帝の胸像や「アポロとニンフへの奉納浮彫」など、イタリア・ナポリ国立考古学博物館の所蔵品を含む100点以上を展示。日本の銭湯のジオラマなども紹介し、双方の文化を比較する。

人気漫画「テルマエ・ロマエ」の主人公ルシウスも案内役としてパネルで登場。作者のヤマザキマリさんは「お風呂は人間の『内部インフラ』を支えてきた。時空を超えて、極東の地でこうした展覧会が開かれるという、古代ローマの文明が持つパワフルさを感じてほしい」と話している。

6月9日まで。入場料は一般1200円など。

どら蔵

朝井 まかて

第五章　飛ぶ鳥（四）

「どら蔵が一々口を挟むから、いつもより手間取っちまったわえ」

「よう言う。おれの意なんぞほとんど汲んでくれへんかったくせに。それは好きやから手許に置いときたい、それは面白が嵩んでるのやとお願いしても、いっかな相手にしてくれへん。いやあ、さすがはおれんさん。べらぼうに手強いかないまへんわ」

喋り散らしながら、くらくらする。

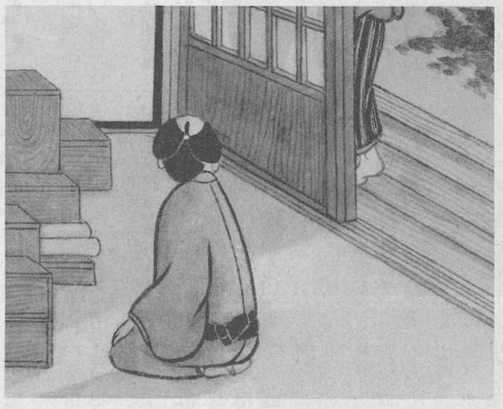
今の光悦もどきが最後の品だった。まさに瓢箪から駒、金の「利息無し」に持ち込めはしたものの、この山々をどうにするのはこれからだ。

親分はのっそりと入ってきて、大中小の山に近づいたを組んで検分している様子だが、何も言わない。

「明日、下取り屋に引き取りに来させる」

最も大きな山を顎で示した。一見で、それが見捨てる山と判別した。

「それ、いかほどになりますやろうか」



親分は何も答えず、身内の三人を振り返った。

「腹、へったろう」

「へったへった。ほら、どら蔵、ぼやぼやしてねえで飯の度しな。こちとら、煩悩だらけの百八つを仕分けしたんだくたびれたの何の」

おれんと金助、末吉は首や肩を回しながら、親分と共に